

**芸** 術や学問をつかさどる女神は、ミューズ (Muse) と呼ばれる。

「ミュージック (music=音楽)」や「ミュージアム (museum=博物館)」「モザイク (mosaic)」も。

細かく砕いたさまざまな色の石のかげらを、ひとつひとつ、手ではりつけていき、壮大な模様を完成させる技法。「モザイク」と呼ばれるようになったのは、ミューズに捧げられた洞窟にほどこされた装飾だったためとも伝えられるが、いやいや、この装飾技法もまた、ほかの芸術作品や学問の成果と同じように、沈思黙考 (Meditation) が生み出す果実だからではなからうか。器用な手先と体力と根気はもちろんのこと、デザインの構想力や配色のセンスをも求められるその工程には、やはり芸術の神ミューズが関わっていると思えない。

「けはいいいじゃないか」と見えるのだが、実は、一枚の石板は案外、衝撃に弱い。それよりも細かく砕いた石を寄せ集めたほうが頑丈になり、かつ、石と石の継ぎ目 (目地) が水はけをよくするという効果も生まれる。そんなモザイクの土木的長所を、榑崎さんは教えてくれた。

「大理石は、磨かれた表面じゃなく、ざらっとした割り面を使うんです。なるほど、ざっくりとした割り面のほうが、人間の手作業のぬくもりを伝えるにふさわしいようにも見えてくる。現代、モザイクがもっとも盛んなのはイタリアだが、それは遺跡を通して親しまれているためというよりむしろ、多少、手作業的ななつき感があるほうが「味が出る」と評価を得られるモザイクの性質そのものがイタリア人気質に合っているためかもしれない。

「何事も几帳面が好まれる日本で、モザイクアートを仕事にしている榑崎さんの、そもそものモザイクとの出会いは「夢中になれるものを探して」出かけたパリだった。そこで偶然、さまざまな色の美しい大理石のかげらに魅せられ、モザイクアートを学ぶ。やがてもっと本格的な技術の勉強をしたいと思いい、イタリアの専門技術学校へ留学、ついにモザイク技術資格を

取得した。帰国後、パリの美的センスとイタリアの本格的技術を融合させた、実用と装飾を兼ねる独自のモザイクアートを提案し続けている。

榑崎さんの考案した作品のなかでも、ことにオリジナリティが光るのは、ちょっと腰掛けたりものを置いたりできる半円型のベンチテーブルであろうか。直線側を壁につけることができる半円なので、モザイクがかもし出す存在感は大きいのに、意外と場所をとらない。美しさを愛でつつ、未永く使い続けることができそうである。

「モノにもまた、生命力や運命というものがあると思うんです」と語りつつ、榑崎さんは、1本のビデオを見せてくれた。レバノン美術館の修復の過程を描いた映像である。

長い内戦が終わったあと、銃弾の跡でぼこぼこになったコンクリートの箱を美術館のスタッフが叩き割る。すると、こちらの箱から、あちらの箱から、続々と、貴重な美術品が姿を現す。泥だらけになった床のシートをめりめりはがしていくと、現れたのは壮大なモザイク! 戦争が始まったとき、美術品をこうしてカムフラージュすることで守り抜こうとした心ある人々がいたのである。戦争を「生き抜いた」美術品は、志を受け継

Who's who

# 大理石 モザイク

榑崎美保子 37歳

ぐスタッフの手でいねいに修復され、次の世代へと伝えられていく……。

「モノの運命や生命力というものを考えないではいられません。こうして運命的に生き延びる美術品や古代遺跡には、強いエネルギーを感じるんです」。

モノのエネルギーを感じ取り、モノを守り抜こうとする人間の情熱にも涙することのできる、豊かな感受性に恵まれた榑崎さんの次なる夢は、「日本で、新しい石の素材を見つかること」。

「ええ、石、ですか?」「ええ、石屋さんに嫁にいきたいくらい」

スタジオモザイク・アトリエ  
〒134-0081  
東京都江戸川区北葛西2-20-19  
tel & fax: 03 (3869) 3325  
www.studiomosaico@nifty.com

中野香織=文  
text: Kaori Nakano  
福知彰子=写真  
photographer: Akiko Fukuchi





直径520ミリ(右写真)の丸テーブル。デザインは数パターンから選択可で¥200,000から受注生産。インテリアとしても美しく、耐久性にもすぐれた機能的なテーブル。緻密な手作業で製作されるモザイクは、繊細で温かな色あいとやさしい手ざわりだ